館長コラム

美博春景

滝沢　具幸

4月1日より滝沢具幸館長が就任しました。

3月中旬、美術博物館の入口に立つと、淡い光の中に山茱萸（さんしゅゆ）の黄色が春の到来を告げていた。そして今、再び館を訪れると、アルミの三角屋根を彩って、安富桜が見事に咲き誇っている。その凛とした風姿と優雅な色彩はさすが樹齢400年を越す品格を感じさせる。

美術博物館の役割は、魅力ある展示・企画・収集を行い、またそのためのさまざまな調査研究・学芸活動をとおして地域と密接に係わりながら進めなければならないと思う。美術館・博物館ですばらしい展示を見たあとの、あの充実感・満足感は誰もが味わったことのある至福の経験である。身の内に活力がみなぎり、勇気が湧いてくる。飯田市美術博物館がそういった展示をする場所でありたいと花の樹の下で願うのである。

井上正前館長が美術博物館ニュース50号で「礎は固まり、柱は真直ぐに立った…」とすでに述べられているが、今日、内容がますます充実してきていることは嬉しいことである。

当館が平成元年に開館して以来、多くの皆さんの努力は多大であったと推察できる。その土台を大切に生かしてゆかなければならないと心に誓っている。

滝沢具幸プロフィール／1941年 長野県飯田市下久堅生まれ。日本画家（創画会所属）。現在、武蔵野美術大学教授。

大切なことは「和」の心

井上　正（前館長）

仏教の宗祖たちは、この世を去る際、常にその後の弟子たちの親和を願った。己れはミイラとなって身を漆で固定させて形をとどめ、あるいはまた、生けるが如き肖像となって、弟子たちに永遠の和をさとし続けた。

同じようなことを松尾八幡（やはた）の八幡（はちまん）さまでうかがったことがある。町で論争が起こった際、全員で八幡神に詣でたのちその議に及ぶと丸く収まるというのである。

開館当時若かった学芸員たちはみな専門家としての力量を身につけ、青年から壮年になって自信をもって活動している。館の充実ぶりを眼のあたりにする思いがして、まことに慶ばしい。

しかしながらこれからが難しいともいえる。小社会をなす人間の集まりを常に緊張させ、館の活性化を図ることは当然のことであるが、その際に「和」の精神を忘れてはならない。「是々非々（ぜぜひひ）」の議論が活発に行われることは望ましいが、その最後に、宗祖や八幡神のように、人々の心を結びつける大きな「和」の精神の大切さを思い起こしていただきたい。皆は一つのことを実現すべく進んでいる大きな船の同乗者なのだから。

インフォメーション　④→⑥月

◉ 美術博物館 ＞

お問い合わせ：0265-22-8118

◎平常展示

作品と親しむ 1　菱田春草「春秋」	4/1(土) → 4/23(日)
印籠・根付	4/1(土) → 5/7(日)
正宗得三郎	4/1(土) → 5/21(日)
日夏耿之介の眼 Ⅱ	4/8(土) → 5/7(日)
作品と親しむ 2　菱田春草「牧童」	4/28(金) → 5/28(日)
あこがれの景徳鎮	5/13(土) → 7/17(月)
須田剋太の世界	5/26(金) → 7/9(日)
作品と親しむ 3　菱田春草「鹿」	6/16(金) → 7/17(月)

◎プラネタリウム

春の番組「アラジンの大冒険」	→ → 6/4(日)
夏の番組「銀河鉄道の夜」	6/17(土) → 9/3(日)

◎自然講演会

身近な生き物や環境を守る −保全生態学の視点−（仮題）　鷲谷いづみ氏（東京大学大学院教授）	6/17(土) 14:00〜

◎自然講座

東海・紀伊・四国、地質巡りの旅	4/20(木) 7:00〜
地域の生き物を守ることは、なぜ大切なのか Ⅰ	5/18(木) 7:00〜
地域の生き物を守ることは、なぜ大切なのか Ⅱ	6/15(木) 7:00〜

◎美博文化講座

見学会　飯田城を巡る	5/3(水)・6/4(日) 9:00〜
三遠南信地域をつなぐ中央構造線と文化軸・上久堅の民俗	5/14(日) 13:30〜
田中芳男「科埜行雑記」を読む	6/4(日) 13:30〜

◎子ども美術学校（年7回開講　＊要申込）

参加者募集　5／10 締め切り

◎星空観察会

春の大曲線と北斗七星	5/27(土) 19:00〜20:00

◎宇宙をのぞこう

地球の年齢と星の一生	5/27(土) 15:00〜16:30

◎宇宙の日記念作文・絵画

作品募集　6／30 締め切り予定

◎ミュージアムコンサート

今はじまるロマンス バイオリン／村石達哉　ピアノ／武井純子	5/19(金) 18:30〜

◆臨時休館日	5/12(金)・6/6(火)−11(日)

◉ 上郷考古博物館 ＞

お問い合わせ：0265-53-3755

◎玉造部の会

滑石で勾玉を作ろう	5/7(日) 9:30〜11:30

◎大人の土器作り教室

製作	6/24(土)−25(日)

◎下伊那古墳探検隊

三穂・竜丘地区の寺院・古墳見学会	5/27(土) 10:00〜15:00

◎子ども考古博館くらぶ

玉造部の会	5/7(日) 9:30〜11:30

◉ 追手町小学校 化石標本室 ＞

お問い合わせ：美術博物館へ

◎公開日	4/30(日)・5/3(水)・7(日)・6/11(日) 10:00〜16:00
◎化石クリーニング（公開時間中随時）	4/30(日)・5/7(日)
◎化石レプリカ作成（公開時間中随時）	5/3(水)

2006年4月より『美博だより』は『テラス』に改名しました。テラス（TERRACE）は段丘を意味します。

テラス ⊙飯田市美術博物館ニュース⊙ 2006 _ Vol. 073

◉発行日／2006年4月15日　◉印刷／杉本印刷株式会社　◉発行者／飯田市美術博物館　〒395-0034　長野県飯田市追手町2-655-7　TEL 0265-22-8118　URL http://www.iida-museum.org/

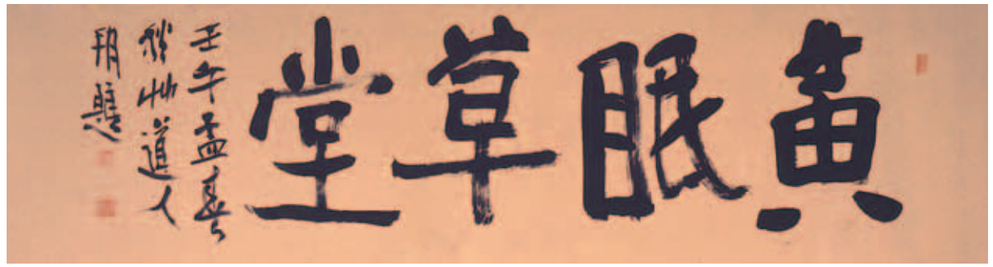
© 2006 Iida City Museum　※本書を無断で複製・転載することを禁じます。

2006 _ Vol. 073

テラス

⊙飯田市美術博物館ニュース⊙

IIDA CITY MUSEUM NEWS "TERRACE" Vol.073
発行：飯田市美術博物館
http://www.iida-museum.org/



①「黄眠草堂」 會津八一 1942 本館蔵

① 會津八一 書簡（日夏耿之介宛） 1940 本館蔵

表紙の作品 ／「牧童」 菱田春草 1893 本館蔵

②「青花葡萄棚文水指」17c前 本館蔵

②「青花吹墨地松竹梅図盤」17c前 本館蔵

②「五彩麒麟瑞獣文輪花形盤」16c後－17c前 本館蔵

②「五彩花鳥文仙盞瓶」16c中 本館蔵

③ 犬と猿の首引き 蒔絵印籠 本館蔵

③ 琵琶法師に犬 牙彫根付 本館蔵

③ 龍に仔犬 牙彫根付 本館蔵

日夏耿之介の眼Ⅱ　會津八一との出会い　没後五十年 ① 4/8(土)→5/7(日)

秋艸道人會津八一（1881～1956）は、歌人、書家、美術史家として、それぞれの道で大成した才人でした。

いっぽう、詩人、英文学者、翻訳家として活躍した日夏耿之介（1890～1971）は信州飯田の生まれ。宝石のように彫琢された言葉が織りなす象徴詩の世界は、詩壇に異彩を放つものでした。

新潟県新潟市に生まれた八一は明治14年生まれ、日夏よりも九歳年上でした。早稲田大学文学部で教鞭を執る同僚だった時期もあり、両者ともに周囲から畏怖される存在として相通ずるものがありました。

坪内逍遙を慕って東京専門学校（早稲田大学）に入学した八一は、英文学を専攻し卒業後は英語教師として郷里新潟の有恒学舎（県立有恒高等学校）に赴任、のち早稲田中学へ移り教頭をつとめました。

教育者として後進の育成に努めてきた八一は、四十歳を過ぎた頃から重い腰を上げ、いよいよ歌人、書家として本格的に始動しました。奈良を愛した八一は、いにしえの都に想いを馳せ、大正13年（1924）には歌集『南京新唱』（春秋社）を発表しました。

奈良への強い関心は古美術研究に及び、昭和9年（1939）には法隆寺ほか斑鳩の古寺の研究によって文学博士となりました。教材として蒐集した膨大な古美術品は、早稲田大学會津八一記念博物館に収蔵されています。

八一は、空襲で罹災した昭和20年、早稲田大学を辞して郷里の新潟に戻りました。夕刊ニイガタの社長に迎えられ、同26年には新潟市名誉市民に推されるなど郷土の文化人として愛され、昭和31年11月21日永眠しました。

従来、八一と日夏との交友関係についてはあまり話題になることはありませんでしたが、二人の間を往来した書簡の数々は、二人が交流を深めていった様子を生き生きと物語ってくれます。

平成18年は會津八一の没後満五十年にあたります。これを機に本展覧会では、当館の所蔵する日夏耿之介コレクションの中から八一の書や日夏に宛てた書簡などを紹介し、二人の交流の様子を探ります。

平常展示

あこがれの景徳鎮 ② 5/13(土)→7/17(月)

磁都とも俗称され、中国磁器の代名詞ともなっている景徳鎮は、中国中部江西省に位置します。かつては、昌江の南岸にあたることから昌南鎮と呼ばれていましたが、宋代の景徳年間（1004～1007）の記銘が入った磁器が皇帝の目にとまり景徳鎮という名前を与えられたといいます。

景徳鎮の磁器が優れている理由は、昌江の北にある高領山からカオリンと呼ばれる良質の磁土が産出したことにあります。カオリンはきめ細かい白色の粘土で、宋代の頃からこれを原料にした青白色の磁器が焼かれました。影青（インチン）と呼ばれるこれらの製品は、宮廷に召し上げられて高い評価を受けました。続く元代には、この白磁の表面にコバルトで絵模様を釉下に描く青花という技法が発展して美麗な磁器が生み出され、景徳鎮の名は飛躍的に知られるようになりました。

明代に入ると、官窯である御器廠が置かれ、その水準はますます高まっていきます。やがてそれらの名声は世界中に知られることになり、明清時代の中国の重要産品として、豊富な作風の製品が海路を陸路を渡っていきました。

ヨーロッパ各地の宮廷、中近東や日本にも景徳鎮の製品はもたらされ、いまなお世界水準の美術品として親しまれています。まさに景徳鎮の磁器はあこがれの的だったわけです。当館が所蔵する綿半野原コレクションの磁器もほとんどが景徳鎮の製品で、特に日本で好まれた古染付と呼ばれる素朴な作風の青花が中心となっています。この古染付に加え、官窯で焼かれた美麗な青花、青花と並び景徳鎮を代表する五彩など、景徳鎮が最も栄えた明代の磁器を中心にご紹介いたします。

平常展示

印籠・根付 掌の動物園 ③ 4/1(土)→5/7(日)

日本人は昔から力強いものや大きなものよりも、むしろか弱いものや小さなものに魅力を感じてきた民族といわれます。「うつくし」という言葉も、古くは小さいものをかわいいと眺める気持ちを表わす言葉でした。

織物や蒔絵といった工芸品にみる、繊細な技術力は目を見張るものがありますが、なかでも手のひらに収まってしまうほど小さな印籠や根付は、まさに日本人の好みにあった「愛し」き逸品といえましょう。

印籠はもともと薬や印鑑の入れ物で、紐の先に根付と呼ばれる留め具をつけ、ずり落ちないように腰の帯に留めて持ち歩きました。

漆や金箔を用いてきらびやかに彩られた印籠はぜいたく品であり、社会的地位の高さを示す証でもありました。また動植物や故事などを題材にしてデザインされたその姿は、持ち主の好みはもちろん教養レベルまでも映し出していたようです。

いっぽう根付は、手のひらに乗る「愛し」い彫刻でもあります。その可愛らしい姿は、現代のいわゆる〝食玩〟や携帯電話のストラップを思わせます。

印籠や根付は、幕末以降海外のコレクターの元へと大量に流出してしまいました。彼らもまたお気に入りの印籠や根付を手のひらで愛玩し、至福のひとときを過ごしたことでしょう。

今回の展示では、動物たちをモチーフにした印籠と根付をご紹介します。春の陽気に誘われて、手のひらサイズの動物たちが集まった「愛し」い動物園をのぞきにきてください。

調査ノート

伊那層の時代の中型の鹿

伊那層（二百～五十万年前）とは、礫層主体の地層で、飯田下伊那の段丘崖や川沿いに露出しています。植物化石や長鼻類の足跡化石が見つかっていますが、哺乳類などの骨化石はまだ見つかっていません。しかし、東京西部などにみられる同年代の地層からは、哺乳動物化石の中では鹿類の骨化石の産出が最も多いため、伊那層からも鹿が発掘される可能性が最も高いと予想されます。

東京都昭島市の多摩川に露出する、伊那層下部と同年代の約百八十万年前の地層から二〇〇二～二〇〇四年に三個体の標本（左右の下顎骨、角つき頭骨、腰椎から左右の後足）が発掘されました。このうち角つき頭骨は、この年代としては日本からは初めてのものです。

そこで今回、この中型の鹿化石の全身骨格レプリカを組み立てて、本館のエントランスに展示しました。この鹿化石の全身骨格レプリカは、現生種のサンバージカ（角部分）とエゾジカ（角以外）の骨格をベースにして組み立て、産出部位を色分けしたものです。

多摩川産の中型の鹿の体の大きさは、北海道に生息するエゾジカの雄と同じ位の大きさでした。三尖で二番目の枝が内側後方に向き、最初の分岐が低い角の形は、現在インドからタイ、台湾にかけての東南アジアに生息するサンバージカに似ており、多摩川産の鹿は、サンバージカに近縁な種類と考えています。

多摩川産の中型の鹿は、従来はカズサジカと考えられていました。カズサジカの模式標本は、千葉県産の最初の分岐の少し上までが保存された落角で、根元（角座）から高い位置で最初の分岐をすることが特徴ですが、昭島市多摩川より約百万年も若い地層からのものです。

多摩川の同じ産地からは、カズサジカと同様に最初の分岐が高い角化石も産出していますが、多摩川産の中型の鹿化石標本群が、カズサジカと呼べるものかどうかは、現在検討中です。

茶色が産出部位